

「日本3.0」

Vol.13

リーダーとクリティカルシンキング

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

これからリーダーに不可欠な素養。その筆頭上がるのが「クリティカルシンキング」です。

多くのリーダーを輩出しているハーバード大学の教養教育においても、「クリティカルシンキング」は最重要科目のひとつになっています。

「クリティカル」という英語は通常、「批判的な」と訳されますが、人のことを批判する考え方のことを指すわけではありません。

むしろ、「常識や固定概念を疑う考え

方」と訳したほうが適切でしょう。盤石だと思われているビジネスにも問題点があるのではないか、こう挑戦することができないのではないか、こう変えられるのではないか、というふうに先入観なく、物事を上下左右から眺めてみる―そうして新たな視点を獲得し、イノベーションへとつなげていくのがクリティカルシンキングの本質です。

とくに、クリティカルシンキングはこれからの日本で威力を増します。

高度経済成長期の日本では、クリティカルシンキングのニーズはさほどありませんでした。経済がぐんぐん伸びて、何をすべきかが明確な時代に必要なのは、お手本をみつめて、それをスピーディーかつ徹底的に真似ることです。そこで大事なのは、みなが一丸となつて、しゃにむに働くことです。そこでは知的な議論は無用で、猪突猛進の体育会系が重宝がられます。意見の多様性は邪魔になるだけです。

だが、このやり方ほど答えがない時代にもろいものはありません。間違っ

た方向に進んでも、修正が利かないだけに、ダメージが深くなります。

儒教思想の色が濃く、権威志向が強いせいか、東アジアの国では、クリティカルシンキングが育ちにくいといわれます。ただ、こうした考え方は、日本人にとって決して不慣れなものではありません。

武道には「守・破・離」の精神があります。「守」とは、師匠の教えを守り、型を身につけること、「破」はその一度身に付けた型を疑い破ること、そして、「離」は自分なりの新しい型を確立することです。

これまでの日本は、師匠⇨欧米の教えを吸収することに躍起になってきました。そしてやっと今、その型を疑い破るステージにさしかかっているのです。さらには、「破」のステージをも超え、自分なりの型をみつける。それこそが、あらゆる分野における日本の今後のテーマとなります。今こそ日本人は、この古来の教えを思い返すべきときなのです。



Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか?」がある